カトリック
広島教区報

No. 106
カトリック
広島司教区

発行責任者
広報担当
服部大介神父

「点訳版」あります。
お問い合わせください。

広島市中区幟町 4-42
広島司教館内
TEL（082）221-6017

アレキシオ白浜満司教叙階式

着座のご挨拶
アレキシオ白浜満司教

九月十九日（月・祝）、世界平和記念聖堂にて司教叙階の恵みを受け、正式に広島教区に着座することができました。司教叙階式に際して、種々の事前の準備、当日の色々な奉仕、また、数多くの霊的花束を賜りました。皆さんに、改めまして心から御礼申し上げます。本当にどうも有り難うございました。

十月一日（土）と二日（日）より、教区内の教会の公式訪問と堅信式を開始しました。

皆さんとの出会いを神様に感謝し、教区の現状把握に努めながら、教区創立百周年を一つの大きな節目に位置づけて取り組んでいきたいと思います。教区目標では、「家庭へのチャレンジ」から「教会へのチャレンジ」へと展開して行く時を迎えています。具体的には、すでに話し合いが進められている、十年後の教区事情を推測しつつ、今、わたしたちにできることにチャレンジしていければと思います。

今年、九月四日に列聖されたマザーテレサは、「小さすぎることは何一つありません。小さなことを大きな愛をもっておこなえば、神様のために素晴らしいことをしたことになります。」と教えていました。わたしたち一人ひとりも、自分にできる小さなことを大切にし、「主よ、どうぞ、わたしをお使いください。」という祈りをささげながら、力を合わせていきたいと思います。

広島教区の皆さんと一緒に信仰の旅路を歩めますことを心から嬉しく思います。力不足ではありますが、どうぞよろしくお願いします。

白浜満司教

叙階式の中で、駐日教皇庁大使館のパヴェル・オビエジンスキー参事官（右）からペルガメナ（司教任命書、ラテン語で記されている）を受け取る白浜司教（左）

白浜司教叙階式・じゃけえのう　一～六面
災害サポートセンター・J―CaRM広島便り　七面
平和行事・広島教区の施設　八面
地区・海峡からの風　九～十面
青少年・ひと粒　十一～十二面

じゃけえのう

「じゃけえのう」とは広島弁で「だからね！」という意味。

「他のすべての国民と同じようになり」

紀元前千年ごろ、神との契約に生きる民に王を求めるという大きな転機が訪れます。

サムエル記下には次のように記されています。

「ほかの国々のように、我々のために裁きを行う王を立ててください。（8・5）我々もまた、他のすべての国民と同じようになり、王が裁きを行い、王が陣頭に立って進み、我々の戦いをたたかうのです。（8・19）」

それに対して神は、民が求める王が持つ「権能」（8・11―18）を次のように述べます。

戦いのための徴兵、娘たちを料理女やパン焼き女として徴用、正当な所有者からの土地没収、その土地を自分の家臣に分配、穀物や羊の十分の一の徴税を通じて民を自分の奴隷とする。想像していなかったこのような事態に、民は自らが選んだ王のゆえに、泣き叫ぶと言うのです。

神の庇護（ひご）のもとにモーセに導かれてエジプトを脱出した民は、十二部族の連合体を形成し、士師を中心に神との契約を意識する社会を形成していました。

しかし、いまや士師は神の道を歩まず、周辺の都市国家や民族との戦いの危機感の中で、周りの国々と同じになる仕方を選択したのです。民が普通だと考えた他の国々のように、暴力には暴力、侵略には侵略、武力こそがすべてとの考えに民は熱狂していきます。戦いの勝利は国土の拡大と富をもたらし、王の宮殿も神の神殿も荘厳に建てられました。

その結果、行き着いた先は王国の分裂と滅びでした。その間、自らが選んだ王のために無数の命が失われ、嘆きと泣き叫ぶ声が巷に絶えることはありませんでした。王制度は、おおよそ四百年の夢物語に終わります。

戦いのためにあらゆるものを支配する王に否定的な神の言葉は、預言者に引き継がれ、イエス・キリストの福音で宣言され、長い歴史を通して私たちの心に刻み込まれていきます。

周辺の危機が言われる時こそ、神の言葉に目を留める時かもしれません。

（原田豊己神父）

司教叙階式に司教・司祭・神学生二百人以上、二千人を超える人たちが集う

台風十六号が九州地方に被害をもたらす九月十九日、朝から重たい雲が空を覆い、叙階式直前から降り出した雨にも関わらず、新司教叙階式に二千人を超える参列者が世界平和記念聖堂に集い、感謝の祈りと喜びに満ちた時を共有した。

主司式は二〇一四年八月まで広島教区司教だった前田万葉大司教（大阪教区）。白浜司教は叙階式の中で、司教の椅子に着座し、第四代広島教区司教として正式に就任した。

司教団が見守る中、祭壇の前で床に伏す白浜司教

白浜司教に按手する前田大司教
白浜司教は、第5代教区長三末司教の祭服（カズラ）をまとった

聖香油の塗油　白浜司教の額に塗油する前田大司教

来賓として、駐日教皇庁大使館のパヴェル・オビエジンスキー参事官、サン・スルピス司祭会カナダ管区の管区長ジャック・ダルシー神父、カナダのエミリウス・グーレ名誉大司教（サン・ボニファス教区）、韓国釜山教区のソン・サムソク補佐司教、広島県宗教者連盟、白浜司教の兄弟姉妹・親戚の方々と共に、日本の十六人の大司教・司教、長崎教区や福岡教区をはじめ全国からの司祭・修道者、白浜司教と関係のある全国の方々、そして多くの広島教区民が新司教の誕生を祝った。

会場は多くの参列者が来ることを想定し、大聖堂、地下聖堂、エリザベト音楽大学セシリアホールを準備した。そのため、大聖堂以外は、モニターを準備し映像中継に合わせて祈った。また、その映像は同時にインターネットで外に向けて配信された。

午後一時半から始まった叙階式は滞りなく進み二時間半近くあった。

ミサの福音書朗読の後、叙階の儀が行われ使徒座の任命書がラテン語と日本語訳で読み上げられた。続く説教は前田万葉大司教が俳句を織り交ぜながら行った。

ミサの終わりに、日本カトリック司教協議会会長の髙見三明大司教（長崎教区）の挨拶、続いて今年七月にポーランド・クラクフで開かれたワールドユースデー（世界青年の日）大会に参加した岡山、広島、鳥取の三人の青年が挨拶した。

最後に挨拶した白浜司教は、謙遜と感謝に満ちていた。

叙階式後、カトリック会館一階、マリアホール、野外テントの下で祝賀パーティーがにぎやかに行われた。

青年たちは、白浜司教の紋章をデザインしたTシャツを販売。その日に完売した。

この日の天候とは正反対に、終始、笑顔があふれた叙階式であった。

↑サン・スルピス司祭会のホルヘ・パチェコ神父と白浜司教　2人は、神学校で共に学んだ
ミトラは、日本カトリック神学院の神学生たちから贈られたもの

←左から朴孝鎮（パクヒョジン）神父、金起瑩（キムキヨン）神父、韓国釜山教区のソン・サムソク補佐司教、白浜司教、金楹洙（キムヨンス）神父

司教団に受け入れられた白浜司教　前田大司教と挨拶を交わす

牧杖（バクルス）の授与　教区長のしるしである牧杖が前田大司教から白浜司教に手渡された　この牧杖は、第4代教区長、野口司教が使っていたもの

アレキシオ白浜満司教プロフィール

1962 年 5 月 20 日	長崎県南松浦郡新魚目町米山に生まれる 長崎大司教区・仲知小教区（米山教会）出身
1990 年 3 月 19 日	司祭叙階（長崎大司教区・カトリック浦上教会）
1990 年 8 月	カナダ・モントリオール大神学校にてフランス語研修
1993 年 1 月	サン・スルピス司祭会カナダ管区に入会
1993 年 2 月～ 1995 年 3 月	パリ・カトリック学院の典礼高等研究所で典礼学 ・秘跡神学を専攻し、修士号を取得
1995 年 4 月～ 2008 年 3 月	福岡サン・スルピス大神学院・養成者
1995 年 9 月～ 現在	日本カトリック典礼委員会・委員
2001 年 4 月～ 2009 年 2 月	東京カトリック神学院・講師
2009 年 4 月～ 2012 年 3 月	日本カトリック神学院・養成者（東京キャンパス）
2012 年 4 月～ 2016 年 7 月	日本カトリック神学院・院長
2016 年 9 月 19 日	広島教区司教叙階・着座

OMNIA PROPTER EVANGELIUM
『福音のためならどんなことでも』

司教紋章の説明

旗の中央にある赤い円は「愛である神」（1 ヨハ 4,8）と、その愛が込められているエウカリスティア（聖体）を示している。そして、旗全体に広がる黄金色は「神のいつくしみ」を表し、教皇フランシスコが制定した「いつくしみの特別聖年」中に、司教任命を受けたことを暗示している。

「愛である神」（赤い円）に連なる 3 つの星は、イエス、マリア、ヨセフ、すなわち「聖家族」を表している。また、赤い円内の上方に見える「A（はじめ）とΩ（おわり）が記された書物」は、神の御子イエス・キリストがのべ伝えた「福音」を示し、その下方に描かれている「オリーブの葉をくわえた鳩」（創 8,11）は、広島教区の固有の目標である「平和の使徒」のシンボルである。

この司教紋章は、「愛である神」によって一つに結ばれ、そのいつくしみに促されて、「福音のためならどんなことでも」（1 コリ 9,23）受け入れて協力した聖家族のように、5 県（山口、島根、広島、岡山、鳥取）に広がる広島教区の神の家族一人ひとりが、自分にできる固有の役割（召命）に目覚め、互いに協働して、神の愛と福音を伝える「平和の使徒」となれるように、という願いが込められている。

広島の白浜も満ち満月や

大阪教区
前田万葉大司教

共に祈りを捧げる前田大司教と白浜司教

広島教区の司祭、修道者、信徒の皆さま、白浜満新司教・教区長さま誕生、まことにおめでとうございます。まずは、「**広島の白浜も満ち満月や**」と、新司教さまの名前にちなんで、祝句を贈りたいと思います。広島教区の皆さまが、待ちに待った新司教さま誕生の願いが、約二年ぶりに満ち満ちて、まさに満足そのものといった感がいたします。

そして、白浜満司教さまご本人にも、月並みながら「**新涼や白浜満司教さま**」と、お祝い申し上げます。しかしまた同時に、「**ご苦労さまという広島の薄紅葉**」との句も贈りたいと思います。確かに、新鮮ですがすがしく、さわやかでかつ喜ばしいことですが、同時にまた大変ご苦労なことでもあるからです。教区の皆さまのお祈りとご理解ご協力がどうしても必要になります。私の後継者であり、大事な同郷の後輩でもありますので、教区の皆さま、私の時以上にどうぞよろしくお支えください。

広島教区の皆さまのご支援はもちろんですが、白浜満司教さまのご家族、特に仲知・米山教会の皆さまのお祈りとご支援もこれまで以上に大切になります。「**米山の白浜満ちて天高し**」、「**仲知という良き牧者たれ爽やかに**」と、これも名前・地名にちなんで、お祝いと励ましの句を贈ります。仲知・米山の人たちにとっては、おめでたいことではありますが、同時にこれまで以上の限りなく高い祈りと支えが要求されます。また、白浜満新司教さまにも高い霊性と「牧者は羊を知り羊は牧者を知る」というお互いに命懸けのかかわり（**知る仲**）が必要になってまいります。若くても、司祭、修道者や信徒たちのお父さんでなければなりません。同郷の島本要大司教さまが仲知会でつぶやいた「わたしたちは、皆にいかに美味しく食べてもらうかだよね＝パンになれという意味」を受け継ぎたいものです。まだ司教になって五年しかたっていない私が、偉そうなことは言えませんが、「司教はいつくしみ深いお父さん」に徹する努力が必要だと思います。神学生時代から「聖人」と尊敬されている白浜満司教様のことですから、大丈夫とは思いますが、お互いに、さわやかに頑張りすぎないように「顔晴れ」で行きましょう。「福音のためならどんなことでも」のモットーと、記念カードの「御手にゆだねます」で爽やかに歩んで行きましょう。「**顔晴れという広島の薄もみじ**」、「**福音の使徒継承や爽やかに**」

←左から、駐日教皇庁大使館のパヴェル・オビエジンスキー参事官、カナダのエミリウス・グーレ名誉大司教（サン・ボニファス教区）、韓国釜山教区のソン・サムソク補佐司教

親愛なる兄弟である白浜司教様、

サン・スルピス司祭会総長
ロナルド・D・ウィザーラップ神父

わたしたちの教皇フランシスコが、あなたを広島の司教に任命したという知らせを受けたとき、わたしは複雑な気持ちでした。わたしは一方で、日本の大神学校が有能な養成者・院長を失ったことを残念に思います。他方で、あなたが広島教区の第一の牧者というこの非常に特別な役務のために選ばれたことは、あなたにとって、またサン・スルピス司祭会にとって栄誉です。

わたしは、他の責務のために、二〇一六年九月十九日に行われるあなたの司教叙階式に参列できず、申し訳ありません。非常に残念です。しかし、わたしたちの会員であるベルナール・クワン神父様が、総長顧問会とわたしの名代として、あなたの叙階式に出席してくださることになり、喜んでいます。クワン神父様は、日本におけるスルピス会の活動に貢献し続けておられるだけでなく、ベトナムのフエにあるわたしたちの神学校でも教えていますので、彼はわたしの代理としてふさわしい人です。

世界中のすべてのスルピス会員の名において、わたしはこの栄誉のために、あなたに心からのお祝いを述べ、また、わたしたちの祈りと祝福を約束します。よい牧者そのものであられる主イエスが、新しい使命のためにあなたを支え、その御心にかなうよい牧者になるというあなたの決意を強めてくださいますように。

個人的な切なる祈りと祝

福を込めて、
キリストにおいてあなたの兄弟である　ロナルド・D・ウィザーラップ
二〇一六年八月二十五日
フランスの聖ルイの祝日に

広島教区の信者のみなさん、新司教誕生おめでとうございます

日本カトリック神学院
院長代行　中野裕明神父

白浜満新司教様はご承知のように日本カトリック神学院の院長でした。院長の任期をあと一年半残しての卒業でした。養成者団のひとりとしては青天の霹靂（へきれき）で、今後神学校はどうなるか不安がよぎりました。いわばそれほど白浜院長に頼っていた、換言すれば楽をさせてもらっていたという現実を突きつけられた形になりました。

白浜司教様については、用意周到な会議の準備、一人ひとりの意見に心から耳を傾ける真摯な態度、寸暇を惜しんでは古い典礼祭具を収集する、典礼魂、たまには会話にダジャレを混入させたり、替え歌を作ったりして、雰囲気を和ませる、旺盛なサービス精神。挙げればきりのない素晴らしい人格の持ち主です。それに加え、神様に仕える祈りの人です。神学校では、いつのころからか、神学生の間で「聖人」と評されるようになりました。

あまり褒め上げると、司教様ご自身が動きずらくなるかも知れないのでこの辺でやめにします。あとは、皆さんで確かめてください。

白浜司教を中心に司教団と司祭団

出かけて行こう

広島司教区
平和の使徒推進本部
肥塚俊司神父

いつくしみ深い父なる神は、フランシスコ教皇による任命によって、二年間司教座空位であった広島教区に、アレキシオ白浜満司教を新しい牧者として与えてくださいました。

永遠の牧者であるイエス・キリストは、使徒たちを派遣して、教会を設立し、使徒たちの後継者である司教たちが世の終わりまで教会を牧することを望みました。（教会憲章十八）

「今日、イエスの命じる『行きなさい』ということばは、教会の宣教のつねに新たにされる現場と挑戦を示しています。皆が、宣教のこの新しい『出発』に招かれています。」（教皇フランシスコ　使徒的勧告「福音の喜び」二十）

白浜司教が掲げられたモットー「福音のためならどんなことでも」を実践するために、広島教区民のわたしたち皆が、イエスの「行きなさい」との呼びかけにこたえて出かけて行きましょう。「平和の使徒」として福音の光を運びましょう。

「わたしたち皆が、その呼びかけにこたえるよう招かれています。つまり、自分にとって快適な場所から出て行って、福音の光を必要としている隅に追いやられたすべての人に、それを届ける勇気をもつよう招かれているのです。」（前掲書二十）

退堂の様子　侍者を先頭に司祭団と司教団の長い列が続いた

叙階式当日、ご来賓の方へ突撃インタビュー！

白浜司教の兄弟姉妹

●二神昭子さん

お姉様（八人兄弟の次女）

●白浜一さん

弟さん（四男）

●白浜悟さん

弟さん（五男）

左から白浜一さん、二神昭子さん、白浜悟さん

「やんちゃで、みんなを引っ張っていく性格でした。」「司教様は、私たち八人兄弟の五番目で三男」「小学校を卒業して神学校に行ったので、五島で一緒に生活した記憶は小学校までです。夏休みと冬休みは帰ってきましたが。」「母が作るドーナツが好きでした。」

当日は、三人のご兄弟のほかに西田京子さん（長女）、長浦信枝さん（三女）もご参列されておられました。

白浜司教の親戚

●眞浦ミユキさん　叙母様

●眞浦ひとみさん

従妹（叙母の娘）

司教様と同学年

●北川百合江さん

叙母様の従妹

左から北川百合江さん、眞浦ひとみさん、眞浦ミユキさん

ミユキさん「司教様が神学校に入られた頃、福岡の新田原（しんでんばる）に嫁ぎました。小さい頃、お土産を買って持って行ったら、いつも喜んでくれました。」

ひとみさん「子どもの頃、初めて会ったとき、にこにこしていたのが印象的でした。そのとき、『横になって気楽にしていいよ。』って言われたことを今でも覚えています。小さい頃から良い人でした。」

お告げのマリア修道会

●シスター山添耀子

●シスター島本藤子

左からシスター島本藤子、シスター山添耀子

シスター山添「彼が保育園から小学六年生まで、米山教会で一緒でした。まじめで頭が良く、体の大きい子でした。いつもリーダーシップを取っていました。」

シスター島本「彼が小学四年生の頃、出会いました。神学生の時、米山教会の裏庭に自分で石垣を積み、手作りのルルドを作ったことを覚えています。」

シスター山添「運動や踊りが苦手な子でした。『なぜ、歌の練習をたくさんしなければいけないのですか』と聞かれ、イエス様のために歌って聞かせあげてと言ったことを思い出します。司教様の祖父が勉強熱心な方でした。」

シスター島本「シスターの終生誓願の前のご指導をよくしてくださいました。八日間の黙想が心に残っています。とても優しい方です。」

日本カトリック神学院

●下原和希助祭

（長崎教区）

「私が神学校に入って一年目の霊的指導が、同じ五島の先輩の司教様でした。そのため、相談ごとをよく聞いてもらっていました。」「おやじギャク（冗談）が好きで、食事の席で『布団がふっ飛んだ』と言って一人で笑い、ちょっと間が開いてみんなが笑う。そんな雰囲気で場を和やかにしていました。」

「良い意味でも悪い意味でも『働き者』。院長になっても、あちこち飛び回っておられました。」「やなせたかしのアンパンマンの歌を元にした話をよくされていました。アンパンマンに情熱を燃やしていました。アンパンマンのマーチ『そうだ、嬉しいんだ～♪』を歌って踊っていました。」「よく一緒に食事したり飲みに行きました。その時、いつも『君の好きなものを食べに行こう』と言って私たちのことを優先してくれました。」

皆さま、インタビューにご協力ありがとうございました。

下原和希助祭（長崎教区）

広島司教区災害サポートセンター

原田神父と行く東北・福島視察　報告

九月十五日～十七日、広島司教区災害サポートセンター主催で東北・福島視察が行われました。これは、東北大震災後五年経った福島の〝今〟を知り、未だ風評被害に苦しんでいる人たちを応援したいという思いで企画されたものです。

九月十五日、原田神父以下二十四名は、広島駅を出発。新幹線と常磐線を乗り継いで福島県湯本に到着。湯本教会訪問後、「フラガール」で有名な「ホテルハワイアンズ」に宿泊しました。

九月十六日、震災で甚大な被害を受けた富岡町を訪問。「富岡町交流サロン」の仲山さん（ガイド）に町内を案内していただきました。昨年六月に一度訪問しましたが、当時と比較すれば、富岡駅周辺はかろうじて片付けられているものの、駅から少し離れればゴーストタウンそのものでした。被災者でもある仲山さんは、現在も富岡町にある自宅に帰ることもできません。その後、カトリック原町ベース（ボランティアのためのベース）を訪問、隣接の原町教会でミサを捧げ、ホテル泊。

九月十七日は、飯館村、川俣町を経由して二本松教会へ。途中、川俣町では、「手づくり飴の竹屋菓子店」を訪問、皆で買い物をしました。以前、廿日市教会では、東北支援の一環で、この店の飴を仕入れ、教会で販売していました。

二本松教会では、ミサを捧げた後、昼食。二本松教会の皆さんは、風評被害で苦しんでおられる農家の方々を応援するため震災後、NPO法人「福島やさい畑」を立ち上げ、二本松の農作物や果物を各地の教会で出張販売やネット販売をされています。皆さんもホームページをご覧になって、是非、支援してあげてください。

田んぼの跡地に置かれた大量の汚染土の入ったトン袋や、道路わきに立ててある放射線の線量計が示す数値を見るにつけ、まだまだ除染作業は進んでおらず復興までにはかなりの時間が必要であると感じました。

三日間の福島視察を終え、決してこの震災を風化させてはならないと改めて感じました。

廿日市教会　岡本壮吾

飯館村での除染作業の様子
防護服を着ている作業員が重機で原発汚染土をトン袋に入れている

J－CaRM広島便り

チャリティー文化祭（Charity Cultural Show）

私たちは一緒、また一緒に開催することができました！

ベリス・メルセス宣教修道女会
シスタージョイ

六月二十六日に、二回目のチャリティー文化祭を萩市で開きました。（第一回目は徳山市で二〇一四年に開催）この催しものを実行するのは三つの動機があります。

①山口・島根県在住のフィリピン人に募金を依頼し、諸災害地へ金銭的援助をする。

②歌とダンスを通してフィリピン文化を地域の人たちと分かち合う。

③山口・島根県在住のフィリピン人の結束を育て強化する。

第一回目の企画で得られた義援金は、二〇一四年にフィリピンを襲った超大型のヤランダ台風の犠牲者に送られました。今回の義援金は熊本を襲った地震で今も復興に苦労しておられる熊本の人たちに送りました。この具体的な活動を通して、被災者の方々に、私たちのしていることはお祈りだけではなく、私たちの努力と活動に使っている時間と少額ですが献金を知っていただけるのではないかと思っています。言い換えれば犠牲者の方々の側に立ち、彼らが生活の再生をしていかれる苦しい過程で、彼らが一人ではないことを知ってもらうためです。（今回カリタス日本へ送金した額は約二十万円でした）

今回の萩での開催は萩教会の方々のご協力なくして、また在住のフィリピン人の参加と協力なくしては成功しませんでした。皆さん方の心からの協力に御礼申しあげます。もう一つ加えなければならないことは、Hangog Dance Company（これは広島、岩国、柳井、徳山、防府と萩在住のフィリピン人の歌と踊りのグループです）の協力でした。遠隔地に住んでいる人たちを集めるのは容易ではありませんでしたが、皆さん方の情熱と被災地の方々に少しでも役立ちたいと言う思いがみんなを駆り立てました。

献金をしていただいた方、入場券を販売していただいた方そして券を買っていただき足を運んでいただいた方のお陰で熊本の方々を支援すると言う目的を実現することが出来ました。柳井・益田・浜田・宇部と山口教会の方々が会場に足を運んでいただきました。心からお礼を申し上げます。

困っている人たちに支援の手を差し伸べる事、それはイエス・キリストの信仰を実行するだと思います。またそれは私たちの傍にいつも神がいてくださることだと思います。

今こそヒロシマから
～神のいつくしみの道具となろう～

2016.8.5~6,8.9 平和行事

横断幕を掲げて平和行進
左端、白浜司教　左から3番目、勝谷司教（札幌教区）

今年の広島教区平和行事は、八月五～六日、「今こそヒロシマから～神のいつくしみの道具となろう～」をテーマに、大変暑い中、例年通り各地からの参加者を迎えて開催された。

平和行事は、次代をになう若い人の平和への関心を高めたいという願いから、「戦後百年に向けて、わたしたち若者はどのように平和を実現していくか」をテーマにしたシンポジウムで開幕した。松浦悟郎司教（名古屋教区）をコーディネーターとして、中・高・大学生たちが活発に体験を発表し意見を交換した。かつて高校生平和大使として海外で経験したこと、種から育てた被爆アオギリの鉢を前に置いて、それにまつわる話などがあった。

オープニングの若者たちによるシンポジウム
司会は、松浦司教（名古屋教区）

分科会では、高齢化が進み、被爆の証言者探しが難しい中、二つの「被爆証言」を聞くことができた。他「福島の現状」「子どもプログラム」「シンポジウム第二部」の計五つの分科会が行われたが、どれも盛況だった。その後、日本聖公会との合同行事である平和記念公園での供養塔前の祈りの集い、平和記念聖堂までの平和行進、平和祈願ミサと続いた。

被爆体験を語る　シスター荒谷（ナミュール・ノートルダム修道会）

翌六日朝は、早副譲神父の被爆体験を基とした朗読劇の後、「原爆とすべての戦争犠牲者の追悼ミサ」が捧げられた。その他、広島城・軍都廣島の爪痕をめぐるピースウォーク、聖堂案内、夕方には、世界平和記念聖堂献堂式（一九五四年八月六日）に原爆犠牲者のために歌われたフォーレ作曲のレクイエムが、今年も演奏された。

平和行事実行委員会
栗栖　徹

広島教区の施設
シリーズ　巡回教会めぐり　㉛

光小教区　柳井教会

柳井教会は山口県の東部、岩国市と周南市の間に位置する柳井市にある、光小教区の巡回教会です。現在の聖堂は一九八二年十月十日に、当時の光教会のメディナ神父様の尽力と、信者の寄付で建設されました。建設されるまでは、信者の家や旅館の離れで、ミサを行ったことを覚えています。信者の人たちは教会ができて本当によかったと言っていました。

主に柳井市、周防大島町、田布施町、平生町からの信者で構成されています。守護の聖人はアビラの聖テレジアです。

三十五年の間に、ドラペリエール神父、三喜田神父、アルテイリオ神父、後藤神父の五人の神父様にご指導を受けて来ました。ミサにあずかる人数が少ない時期もありましたが、カメルーン、アメリカ、フィリピン、韓国、ベトナムなどの若い人々が来られた時期もありました。現在は日本人と結婚されたフィリピン出身の方々が来られ、主日には第二朗読を英語で読み、日本人も皆、いつも一緒にミサにあずかります。昨年暮れには県東部のフィリピン出身の方々のための共同回心式を柳井で行うなど、インターナショナルな教会です。家族的で温かい教会だねと言われます。

二〇一四年に後藤正史神父が赴任され、昨年までに三人、この秋には一組のご夫婦が洗礼を受ける予定です。少しずつ信者が増えてきています。

ミサは、毎週日曜日の午前十一時から（第三日曜日のみ午後二時から）。第三日曜日のミサ後は茶話会があります。毎週木曜日の午後二時から、ミサと聖書の分かち合いを行なっています。

柳井教会　撮影：松本繁さん

摂理の一枚

三末司教と白浜司教が一緒の写真に！

この写真は、一九九二年、三末司教と広島司教区の司祭団が、フランスへの巡礼の際に、パリにあるサン・スルピス司祭会総本部を表敬訪問した時のもの。パリ・カトリック学院留学中の白浜司教他数名の司祭に会い記念撮影を行なった。三末司教は、ヨーロッパを訪れるとき、邦人司祭、修道者のところを訪ね食事に誘うなど励ましておられた。写真は、右から白浜司教、瀧井神父、木村神父、豊田神父、三末司教、他教区の二名の神父。サン・スルピス司祭会総本部の玄関前で撮影したもの。

地区便り

山口島根地区

＊聖書いろはかるた

聖書いろはかるたが誕生しました。

かるたの中にある詩は、下関の三つの教会（彦島、細江、長府）の信徒、絵と解説は百瀬文晃神父で作成しました。

広島教区内の各小教区、日曜学校へプレゼントする予定です。山口島根地区センターまで必要部数を申込みください。（FAX083-923-6363）

「聖書いろはかるた」きれいな仕上がりで、詩の札の裏には解説が記されいる

＊日韓学生交流会

八月五日から八日、日韓学生交流会が山口・広島県で行なわれました。

釜山から派遣され、広島教区内で司牧活動をされていた李尚潤（イサンユン）神父が釜山教区で現在担当されている小教区の学生二十一名とともに参加されました。

冬期は日本から数名がゲストとして、韓国に出かけて行く予定です。

＊熊本ＹＭＣＡあそぼうキャンプ

八月十九日から二十日、熊本地震災害にあった子どもたちの保養も兼ねて、熊本ＹＭＣＡが毎年行っているこどもたちのキャンプが宇部市のときわ湖畔ユースホテルで、二泊三日の日程で行われました。

＊被災地夏季ボランティア

八月二十三日から二十八日の日程で、柴田神父（徳山教会）をはじめ小学生とその保護者、十三名が、東日本被災地夏季ボランティアとして岩手県大槌町を訪問しました。

岡山鳥取地区

＊蒜山合宿（岡山鳥取地区青年）に参加して

慈しみ―いつくしむこと、恵み、慈愛（ｇｏｏ国語辞書より）。いつくしむ―かわいがり大切にする、いとおしむ、（Ｇｏｏｇｌｅ検索より）。インターネットの辞書で引けばなんてことのない言葉です。しかし、神様の言葉や御心はウィキペディアやグーグルで検索して分かるようなものではありません。

蒜山での研修二日めは倉吉教会でともにミサを捧げました
真面目に、楽しく、愛と慈しみに満ちた合宿になりました

僕たちは、神様の〝慈しみ〟とは何かを求め、共有し、深め合いたいという目的のもと、岡山県、蒜山で一泊二日の合宿を行いました。この二日間で僕たちはそれぞれが思い描く〝慈しみ〟を神父様も交えてお互いに発表しあいました。一見すると、一人ひとり違うように見えましたが、実はある一点においては皆共通しているように思えました。それは神様がどのような困難な時にも僕たちのことを支えているということです。あることで当時落ち込んでいた僕にはそう思えました。そのことは、その夜でのバーベキューでも感じました。神父様方やみんなと一緒に楽しく過ごさせていただいた時間。―愛と慈しみのあるところ。神はそこにおられる―これが〝慈しみ〟とは何かを知る鍵。そんなことを学んだ二日間でした。

岡山鳥取地区青年連合

広島地区

＊「地区宣教司牧評議会」

日時：十月二日（日）十四時～十六時
場所：広島カトリック会館多目的ホール

＊「地区女性連合会　キリシタン巡礼の旅（北陸・石川）」

日時：十月四日（火）～六日（木）

＊「聖体授与の臨時の奉仕者の集い」

日時：十月二十二日（土）十時～十七時
場所：長束黙想の家（西日本霊性センター）
テーマ：『イエスを囲んで晩餐に参加』

指導：塩谷恵策神父（イエズス会・長束黙想の家）

＊「（信徒のための）『霊操』セミナー」

日時：第七回　十月十五日（土）／第八回・一月二十八日（土）／第九回・四月二十二日（土）時間は十時～十六時

指導：塩谷恵策神父（イエズス会・西日本霊性センター代表）

場所：観音町教会聖堂

＊「リーダー養成のための研修会」

日時：第二回・十一月十九日（土）／第3回・一月二十八日（土）時間は十三時～十六時

場所：世界平和記念聖堂

講師：松浦真弓さん（玉野教会　教会リーダー、元ノートルダム清心女子大学附属小学校教諭）

＊「広島地区司祭の集い」

日時：十一月二十八日（月）十時～十二時

場所：広島カトリック会館多目的ホール

＊「『聖体授与の臨時の奉仕者』養成コース」

①「実践上の注意と実践指導」

日時：十月十六日（日）十四時～十六時半

場所：広島カトリック会館多目的ホール

指導：斉藤眞仁神父（観音町教会）

②「任命式」

日時：十一月二十日（日）九時半～

場所：世界平和記念聖堂

③「フォローアップ講座」

日時：二月五日（日）十四時～十六時半

場所：広島カトリック会館多目的ホール

伯雲ブロック

＊伯雲ブロック勉強会

九月十一日、出雲教会にて伯雲ブロック勉強会がありました。米子、松江、出雲の三教会が毎年秋に信徒使徒職養成のために行っているものです。

今年は「典礼を中心にいつくしみの特別聖年を考える」をテーマとし、上智大学のA・フィルマンシャー神父を講師に迎え約六十人が参加しました。

朝九時から第一講話「慈しみの特別聖年の意義」、第二講話「特別聖年を典礼で祝う」、午後は第三講話「家庭の中で典礼的に祝う」とミサ（講師と三教会の司祭が共同司式）、最後に分かち合いを行いました。図らずも午後のミサには全日参加が困難な人も多数加わり、およそ百人の盛大な多国籍ミサとなりました。

感想の中では、改めて特別聖年の意義を深く悟ることができた。ゆるし、いつくしみ、平和を静けさの中で想い満たされた時間だったなど、日常を離れて、分かりやすい講話に没頭した感謝の念が多数述べられていました。

A・フィルマンシャー神父の話に熱心に耳を傾ける参加者

海峡からの風 42
下関労働教育センターだより

もっとつながりたい～！

下関に来て今更ながら驚いたのは、毎朝釜山からのフェリーが入港し、毎夕出ていくこと。道路の標識に韓国語が添えられていること。少々くたびれた感は否めないがコリアンタウンがあること。六十周年を迎えた朝鮮学校があること。日常でも頻繁に韓国語が聞こえてくること。

東京よりもはるかに韓国に近く在日の人も多い下関。なぜ？と問うならば、この隣国との古くて新しい課題が見えてくる。

そんな下関で八月二十三日から二十六日まで、韓日合わせて三十名を超える神父、ブラザー、神学生及び協働者が参加する「日韓イエズス会社会使徒職に携わる会員と協働者の交流会」が開かれた。

宇部の長生炭鉱では一九四二年に起こった水没事故により百八十三名の労働者（うち百三十六名が朝鮮半島出身）が亡くなり、遺体が収容されないまま閉山されたが、その出来事を追い続ける「長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会」代表の内岡さん、長年外国人労働者、移住者に関わってこられた古賀教会のジュード神父、そして「辺野古に土砂を送らせない！山口のこえ」代表の大谷さんに現場での体験と思いを語って頂き、また翌日は下関に残る日韓の歴史跡や朝鮮学校訪問を行った。

在日一世のハラボジの体験談や朝鮮学校に通う子どもたちの歌声は、韓国からの参加者の心に強い印象を残したようだ。

韓国と日本の間には、東海（日本海）のみならず歴史認識の問題、戦後補償問題、そして「慰安婦」問題等が横たわっている。しかし私たちには、基地問題や核発電といった一緒に取り組みうる課題もある。姉妹教区としての協力や修道会の連携を活かして、これからも手を取り合って歩んで行けるかしら？

海峡の風に吹かれながら、近くて遠くてやっぱり近い隣国とのつながりを想うこの頃です。

シスター山本紀久代

若者たちの夏

今年の夏も若者たちは、教区内に限らず世界中で貴重な経験をしてきたようです。

広島教区練成会　8月9日～11日

小5～中3を対象にした召命練成会が翠町教会で開催された。参加者は司祭11名、修道者14名を含め70名を超えた。今年のテーマは「マザーテレサに学ぶいつくしみ」。初日は片柳神父様によるスライドショーを使ってのお話、2日目は海水浴、バーベキュー、前日の講話感想をグループごとに発表、3日目は幟町教会まで徒歩で移動しミサと赦しの秘跡を頂いた。猛暑の中でも子供達は元気いっぱいに取り組んでいた。3日間を通じ、寝る前の祈りでは召命の祈りが唱えられた。

今後も皆様に支えられ、この召命の集いが続いていきますように。　（翠町教会 伊藤正広）

広島JOC主催 ヒロシマ平和学習　8月27日～28日

世界各国のニュースや、日本の政治の動向に目を向けると、平和が日々脅かされていくのを感じます。広島JOCは全国の青年を招き、1泊2日の平和学習を企画しました。広島で平和についてみんなで学び、分かち合うことを通して、自分にできる小さなActionを見つけよう！と思いを一つに活動しました。

まずは被爆伝承者の方の講演を聞き、原爆や戦争の恐ろしさ・悲惨さを学びました。人々の苦しみ、思い、願いを、皆で碑めぐり・資料館見学を行いながらも学びました。そしてさらに、感じたことを皆で分かち合い、身近なところの平和に立ち返って自分にできるActionを、一人ひとり宣言したのです。「過去は変えることはできないが未来は変えられる」人間から心を奪う戦争を繰り返さないために、「知る」「伝える」「思いやる」などActionをみんなで起こしていきたいです。　（広島JOC　石原結希）

インファンタ教区訪問　8月17日～23日

マニラから東へ約150キロ。山を2つ越えて到着したのは、とても平和な村でした。最初の訪問は、昨年台風で飛ばされた屋根を、広島教区の皆さんの寄付で修理した学校です。全校生徒とごミサに与り、歓迎会では楽しく交流しました。

その他には市長表敬訪問、フェスティバル参加、女性自立支援の工房訪問など…。5日間のホームステイは短い時間でしたが、贅沢ではないけれど温かいもてなしは心に深く染みるものでした。

尾道教会から始まったこの交流は、三末司教様とラバイヤン司教様の力でより強力に手を繋ぐことができました。お二人は奇しくも、今年4月と6月に天国に召されました。

インファンタ地区は、71年前の戦争で日本軍が罪のない住民を大量虐殺した地区でもあります。悲劇が二度と繰り返されないよう、平和が続くことを願うとともに、お二人の司教様や多くの方々が築いてこられた交流が長く続くようにお祈りしていきたいと思います。

（米子教会　西林いずみ）

ワールドユースデー　7月23日～8月5日

日本巡礼団としてポーランドで過ごした2週間は、夢のような時間でした。キリストのもとに世界中の青年が集い、共に祈ったとき、今までに経験したことのない新しい信仰の灯火が心に灯ったような気がします。それは普段の教会では感じることのできない、パワーに満ち溢れた特別な充実感でした。私たちには何でもできる。私たちは世界を変えられる。神様があの場にいた私たちにそう語りかけてくださいました。そしてWYDで得た信仰、友情、経験の全てが、それぞれの生活に戻った今も私たちの中で輝いています。神様が語りかけてくださったことの全てを私たちは生涯忘れないでしょう。かけがえのない宝物です。この体験を1人でも多くの青年に味わって欲しいです。青年の力を通して、生き生きとした信仰を人々の心に根づかせていけたらいいなと思います。　（鳥取教会　松本弓乃）

広島教区青年大会

白浜司教を囲んで
大会には、全国各地から青年が集まった

九月十八日～十九日に「広島教区青年大会2016～白浜満司教叙階式SP～」が行われました。今回は広島教区の新司教、アレキシオ白浜満司教様の司教叙階式の喜びを仲間と共に分かち合いました。同日程で青年大会を予定していたところに約二年ぶりの広島教区新司教様誕生のビックニュースが舞い込み、私たち青年は大きな喜びを持ち、お祝いをしたいと準備をしました。今回の大会は、教区を超え、京都、名古屋、東京、福岡、兵庫、大阪からの参加者も含め総勢五十一名が集まりました。

一日目の討論会では、教会の大先輩である大人の方と未来の教会の歩みについて深く分かち合いました。その後に行われた前夜祭も盛大なものとなりました。翌朝は司教様と共に青年大会閉会ミサに与り、司教叙階式後は、記念Tシャツ販売と司教様へのダンスのプレゼントをしました。参加者は喜びに満ち溢れた二日間を過ごし、神様から頂いたお恵みを持ち帰りました。

幟町教会　中塚汐音

白浜司教叙階式後のパーティーで披露する青年たちによるダンス　練習にも熱が入った

ひと瀉〈90〉

「世界青年大会に参加して」

細江・彦島教会
ジェームス・ボニー神父

第三十一回世界青年大会（WYD2016）が、七月二十六日から三十一日にかけてポーランドでのクラクフで行われました。百八十各国から二百五十万人を超える若者たちが一つに集まった大会は、祈りと分かち合いの貴重な時間となったと同時に、様々な文化交流の場でもありました。毎回WYDはその時の教皇によって選ばれた一つのテーマに基づいて行われるのですが、今回のテーマとして教皇フランシスコが選んだのは「憐れみ深い人々は、幸いである。その人たちは憐れみを受ける」（マタイ五：七）という聖書箇所でした。クラクフの町から十三キロほど離れた「いつくしみの野原（Campus Misericordiae）」と名づけられた広大な敷地で行われたWYD閉会ミサでは、教皇フランシスコは次のように述べました。「神の記憶により頼んでください。主の記憶は、私たちのデータ全てを書き込み保存する“ハードディスク”ではなく、共感にあふれる優しい心で、あらゆる悪を跡形なく消し去ることに大きな喜びを感じるのです。」一週間続いたWYDクラクフ大会は七月三十一日に行われたWYD閉会ミサで幕を閉じましたが、教皇フランシスコは青年たちに向けて、クラクフへの巡礼の旅で始まった道を歩み続け、神の愛の記憶を他の人たちにもたらすようにと促しました。

今回の大会では日本全国から大学生や社会人をふくめ百四十人の若者が参加しました。日本から参加された方によると、「行く前は祈りや神様のことはあまり知らなかったけど、参加するだけで心が穏やかになり、人生観が変わるような貴重な経験だった」ということでした。また「このような体験は日本じゃ絶対できない」と感じた人もいれば、「全然知らない国の人々とも言葉や文化の限界を超えて交流できてとても楽しかった」という感想もありました。日本の五人の司教様を含め、全世界から集まった五百人の司教様と一万五千人の司祭が教皇フランシスコと共にささげた最後の派遣ミサに共同司式できたことは私にとって一番の思い出になりました。WYDクラクフ大会を通して神様からいただいた様々な恵みを周りの人々にも伝えていくことができるように、参加者の一人ひとりのために祈りたいと思います。

風紋

カープが優勝し、新司教も誕生した広島教区は、今確かに勢いがあるようです。この勢いをどのようにもって行くのかは、私たち広島教区民にかかってくるでしょう。新しい司教様と共に、これからの新しい歩みをしっかりと進めて行きたいと思います（にん）。